



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エトノス・イデオロギー：ソヴィエト民族学における「エトノス理論」の諸相
Author(s)	三栖, 大明
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16975号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99819
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroaki_Misu_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 三 栖 大 明

主査 教 授 青 島 陽 子
審査委員 副査 教 授 宇 山 智 彦
副査 教 授 加 藤 博 文

学位論文題名

エトノス・イデオロギー：ソヴィエト民族学における「エトノス理論」の諸相

*当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、ソ連におけるエトノス論、つまり民族理論の歴史的、思想史的研究である。ロシア帝国の広大な領域と多民族の住民を継承したソ連は、社会主義を標榜したものの、その発展の器として民族を重視した。そのため、ソ連において民族理論は体制イデオロギーや統治戦略に深く関わるものでもあった。本論文はこのソ連独特の民族観の系譜を解析するものである。このソ連期の民族観は、現代ロシアでも大きな影響を有しており、今日的意義のある重要な研究テーマである。

本論文は、ソ連期のエトノス論を巡る議論において、最後までエトノス定義が定まらなかった点を明らかにしつつ、この論争の分析を通じ、ソ連という多民族国家における上からの国家統合と消え去らない下からの民族意識に対し、ソ連期の研究者が如何に対峙したのかを多角的に論じている。一人の思想家・研究者に焦点を当てるのではなく、Iu. V. ブロムレイと L. N. グミリョフという、歴史学畑出身のアウトサイダー的な民族学者が、一方は体制側として、他方が体制の異端として論争を展開した点を対比させることで、ソ連体制イデオロギー、学術体制、知識人の世界など、論争の歴史的背景をわかりやすく解説することに成功している。

スターリン死後、スターリンのナーツィヤ（ネイション）概念にエトノス的な観点を取り入れる契機となった論争から、エトノスをめぐるブロムレイとグミリョフの論争に至る過程の解析を通じて、史的唯物論的なエトノス理解に対する両者の異なるスタンスが描き出されている点も評価できる。従来、ブロムレイの民族理論は史的唯物論に沿ったもので、グミリョフの民族理論はそれとは相容れない生物学的な民族理論であると考えられてきた。この通説に対して、両者のエトノス論の内的論理に深く切り込み、両者の議論の双方に「生物的」・「社会的」な側面があることを明らかにしたことは重要である。とくに、エトノスが「社会」的であるか否かが、史的唯物論的な法則で発展する「社会」という限定的な意味に基づいて議論されていたことや、体制派のブロムレイがエトノスの維持における族内婚の要因を重視したことを指摘した点は注目に値する。

ブロムレイとグミリョフのエトノス定義とエトノス・ヒエラルキー論を比較分析したことで、両者とも、エトノス概念に明確な定義を与えないままに多様な集団を民族集団と見做しつつ、この多様な民族集団がヒエラルキー構造を成して相互作用すると考えたことを析出した点も評価される。このことで、原初主義的なものとして前提される多様な民族集団がより大きな社会を構築していくという、ソ連の独特の民族観をもとにした社会観を展望することに成功した点は重要な成果である。

*学位授与に関する委員会の所見

委員会は、本論文が、ソ連民族論・民族観の解明に貢献するのみならず、広くソ連史全般、ロシア帝国から現在にまで継承されるロシア独特の民族観、それに基づく民族政策や国家・国民統合政策の理解の促進に貢献する労作であると認めた。本論文は、関連資料の幅広い渉猟と豊富な読書量に裏打ちされた緻密な分析であり、4本の査読論文をもとにして書かれたという意味でも、

諸学会での精査を受けた確かな論考であると言える。これらのことから委員会は、本論文が博士号取得の水準に十分達していると高く評価した。

口頭試問の過程で、以下のような点が今後の課題として出された。①スターリンのナーツィヤ定義とスターリン死後のエトノス理論の継承と断絶、②スターリン定義の「心理構造」とそれがブロムレイ／グミリョフの「心理的／行動のステレオタイプ」論に与えた影響、③グミリョフとブロムレイの学問的背景、とくにブロムレイのバルカン研究者としての背景や形質人類学との関係、グミリョフの内陸アジア研究者としての背景や地理学や動物行動学との関係、④帝政期以来のロシア民族学、とくにセルゲイ・シロコゴロフのエトノス論の影響、⑤ソ連社会の同化の進展への民族学者の見解、⑥ブロムレイ／グミリョフとソ連民族政策の関係、⑦欧米の民族理論の受容・影響、⑧マイノリティ出自の民族学者たちの社会的・学問的背景、ソ連におけるマジョリティとマイノリティの文化的関係性、など。これらは論文への批判というより、論文から触発されたさらなる学問的問いであり、今後の研究の発展・展望への期待でもある。したがって、これらの質問は博士論文の価値に疑問を呈するものであるというより、博士論文の完成度と学問的価値の高さを示すものである。また、筆者はこれらの質問に真摯に返答するとともに、今後の研究での具体的な対応策も的確に答えており、委員会は筆者の応答も高く評価した。

以上の審査結果により、本審査委員会は、全員一致で本博士号請求論文が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいと認定した。